

# Peire Cardinal (1)

— アルビ十字軍期の詩 —

井 上 富 江

## (序)

Peire Cardinal は、1180年から1182年の間に、Puy-en-Velay で生まれたと云われている。この数字には、いろいろな異論が、となえられているが、1204年、Toulouse の Raimon VI の secrétaire として、Petrus Cardinalis と署名があり、secrtaire という地位は、22—24才以下ではつけないところから推して、ほぼ確信できるものとされている。又、確実に日付けがつけられる一番古い詩が、1205年であり、これが政治風刺詩の初まりだったとすれば、彼の作詩活動は、少くとも、1200年(20才)の頃はじめられたと、推定される。そうすれば、1180年という数字が、妥当な線であろうと考えられる。

彼の家は、Puy-en-Velay では、相当の家柄で、その一族は、教会参事会員、maitre-professeur 等が多数輩出した名家であった。彼自身も、その父の意志により、chamoine になるべく教育されたのであった。

しかし、当時しばしば催されたPuyの宮邸での祭礼に、彼も参加することを許されていたが、そこで、すでになりに有名であった、Moine de Montaudon であったPeire de Nicのchanson d'amour や、sirventès を、聞く機会を得、非常に興味をおぼえていたことが、Lavaudによって指摘されている。と同時に、彼の家の近くにあったUniversité de st Mayol で教えていたtroubadours (そのなかには、Garin le Brun-Chateaufort de Randonの副領主もいたが)の影響も無視することは、できない。やがて、彼自身も詩作を試み始め、その才能をみとめられて、Toulouse伯、Raimon VIのもとで、secrtaireとして、又poèteとしての地位を得ることになったのであった。

## 〔I〕Peire Cardinal とその時代及び環境

彼の詩を理解するには、彼の生まれた時代と、北フランスとは全く風俗習慣を異にした、Midiの状況を考慮に入れることが、欠くべからざる要素になってくる、そして又、それこそ、彼が、sirventèsを作るようになる過程と、彼のsirventèsの性格を、決定していくものであるといえる。当時のMidiは、Cathareが深く浸透し、cathoriqueへの信仰は、重大な危機に、たたされていた。教皇イノセント3世は、南仏諸侯に対する説得や会談、調停といった、さまざまな試みを行った。しかし、南仏諸侯の間にもCathareは、入りこんでいた上に、他の諸侯達も、積極的にそれを追放しようという気配はなかった。それは、ことCathareのみに限られたことではなく、当時のLanguedocは、Camprou氏も指摘するように、サラセン人やユダヤ人達にも、非常に寛大であった。BéziersやToulouseには、<sup>註(2)</sup>富裕なサラセン商人や、ユダヤ人、スペイン人達の一画もあり、Midiの知的中心であった、Montpellier大学では、ユダヤ人やアラビア人が教授として尊敬されていたという。

1195年のMontpellierでの宗教会議で、「キリスト教徒たるものが、サラセン人やユダヤ人の家に召使いとして働いてはならない。」との布告を出したが、何の効果もなかったという。Cathareに対しても、1165年、Albiの司教Guilhemによって、Lombersの会議が持たれたが、この結果は、Louis VIIの娘、Constanceと、Raimon Vとの離別だけだった。1203年のCarcassonneで行われた

会議では、カトリックの司教でさえ、Cathare の教義のいくつかを支持するにいたった。Toulouse の司教 Folquet に対して、Aymar de Radela 侯が語った次の言葉が、南仏諸侯の偽らざる気持であったであろう。「私達は、彼らと一諸に育ったのです。彼らの中に、尚親がいるものもいるし、お互い平和に生きていく以外に仕方がないでしょう。」

しかし、一方 Cathare の現世での財産所有を認めないという教義が、諸侯達のカトリック教会掠奪の一つの方便として、利用されていたことも認めない事実であった。

1207年 Pamiers の宗教会議も、不成巧に終り、1208年教皇持使 Pierre de Castelnau が殺害されたにいたって、ついに Croisade des Albigeois を、教権によって組織したのであった。

Peire Cardinal が、Toulouse 伯のもとに行った時、このような時代の暗雲が le Puy をも、おおい始めた頃であった。事実 le Puy の宮邸は、1209年、この Croisade の為に、閉鎖されてしまった。そして、Toulouse 伯のもとで、その戦争の渦にまきこまれ、その為に、この血なまぐさい戦さを、つぶさに、見守ることになったということは、彼にとって不幸なことであった。「戦さというものが、どんなに人間の獣性を、たけり狂わせるものであるか。」Joséph Anglade も、この Croisade des Albigeois の、Peire Cardinal に与えた影響の大きさを指摘する。

さて、彼の詩作の時期を、Vossler、Janroy、Lavaud など、諸家のいう2つの時期に分けると次ようになる。

第一期——1200年～1243年

第二期——1244年～1278年

彼の詩をほぼ決定したのは、このうちの第一期、とりわけ、1200年から1229年（この年に Louis XI と Raimon VII の間に traité de Paris が結ばれた。）のこの動乱の時期であった。この期の彼の作品を見、Croisade des Albigeois が、彼の詩に、どう影響を与えていったのかを模索してみたいと思う。

## (II) 初期の詩から amour courtois への訣別

1201年から1202年に書かれたと推定される “Dels quatre caps que/a la crós” は、聖地への Croisade 即、1198年 Frédéric II によってひきいられた第4次十字軍によせて、歌われたと考えられるが、この中には、後の彼の詩にみられる重苦しさは、みじんもない。若き聖職者として、自らのキリスト教への信仰を歌いあげたものであった。ただ、ここで注目すべきなのは、この詩が、ラテン語の宗教詩を借用していることである。

「死んだ木は、生命の木又、知の木となり、苦しみの象徴は、栄光のしるしとなる」という言葉によって、若き、Peire Cardinal が、キリスト教の教義をその根元まで、さかのぼってとらえようとする態度がうかがえる。この態度こそ、カトリックでは、もうすでに少しずつ失われかけ、Cathare や、Vaudois 達によって、追求されていた態度なのであった。

この期につくった amour courtois を扱った時、

“A tota donna fora sens”

“Desirat ai, enquer desir”

が、みとめられ、Toulouse へ招かれることになった。このまま、amour courtois を扱う Troubadour の一員に名をつらねるかにみえたのだが、しかし、時代の暗雲は、もうすでに低くたれこめ始め、le Puy の宮邸そのものも、かつてのはなやかさは、次第に遠くなり、その衰退は、誰の目にも明らかになってくる。彼がその世の移り変りを感じ、婦人への不信（この原因は、明らかではない。）

をつのらせ、もう愛の歌を歌わないと、

“Lo segle rei chanjar” の中で歌うにいたった。そして、Toulouse へ移ってから、

“Ben teinh per fol, E per muzart”

“S’ieu fos amatz o amès”

“Domna que va ves Valénsa”

などに、愛の歌を歌ってはいるが、甘い愛ではなく、愛への動揺した気持、想像の愛と、現実の愛との葛藤という形でしか歌われてはいない。彼の愛に対する態度には、信仰に対する態度と、全く同質のものが認められる。即、完全に純粹で、決して裏切ることも、裏切られることも認めない。常に理性に支えられ、決してその中に狂気のように、おぼれることを許さない。このような態度は、あまりに潔癖で、理性的な彼の生来の性格によるものであるのか、それとも、聖職者としてうけた、その教育によるものであろうか。そして、彼の amour courtois への決定的な訣別は、

“Ar me puese ieu Lauzar d’ Amor”

の中で宣言される。

一方、1207年、教皇特使は、Provence に、Raimon VI を招き、1205年に、教皇との間にかわした「異端追放」の誓約を実行にうつすように、再度返答をうながした時、彼は、それを拒絶し、破門されてしまった。が、彼の領地内での内乱によって、再度教皇に誓約を入れ、彼自身も Croisade des Albigeois の一員として、自分の領地へ、十字軍を入れることになってしまったのであった。彼自身、矛盾にみちた行動をとるのだが、直接戦いに加わった形跡もない。その態度に業を煮やしたシトー修道会の鋭い追求をうけて、Raimon VI、ついに1209年、Simon de Montfort と、たもとを分かって、その攻撃をうけることになった。1211年からその苦難の時代が始まる。Peire Cardinal が、Satire に手をそめ、そのほこ先を、聖職者達、又 Français (即、Languedociens に対する意味で、彼の詩に使われているのは、北仏の人々のこと。) 達に、むけられることになったのは、丁度この頃であった。

### 〔III〕 聖職者に対する Sirventès

彼の聖職者達や、Français への批判の中でも、とりわけ、Croisade des Albigeois を支持し、Raimon VI をこの戦さの中に追いこんだ聖職者達にむける矛先は、鋭いものであった。

“L’Atessi com per Fargan”

“D’Estève de Belmon”

“Un sirventès trametrai”

“Un sirventès ai en cor”

の中でてくる一連の“裏切り者”という表現は、全て1212年から1213年にかけて、おこった掠奪行為に対して、それを導いた者をあらわしているように思われる。即、1212年 le Puy の évêque であった、Bertrand de Chalençon は、十字軍の1員としてついてきていた、Pans IV de Palignac に対して忠誠を誓った。Peire Cardinal にとって、この行為は、十字軍兵士をこの地に腰をすえさせ、le Puy から Bézier にかけてなされた掠奪と殺戮の戦いを、まるで準備したもののようにつながるのであろうか。これは、更に“L’ Archivesques de Narbona” の中で、より具体的に、そして、より手きびしく批難されることになる。十字軍の精神的柱である Citeaux の僧院長、又、1211年の会議の際の立役者であった Arnault Amalric が、彼の Sirventès の中で槍玉にあげられる。

実際のところは、この会議に於いて、Raimon VIは、自らの利がどこにあるかをみきわめるのに汲々として、異端者（hérétique）を、かばう意志など毛頭なかったのではないかと、Pierre Belperronはその著“La Croisade contre les Albigeois et l’union du Languedoc”の中で述べている。ただこの時の条件が「異端を追い払えば、その財産の所有権も、その領地も、彼に与えられるであろう」というものであり、彼自身独力で異端を追い払うには、あまりに深く浸透しすぎていた。しかし十字軍兵士達の力を借りれば、自分の領土さえ Français 達のものになるのは明らかなことであった。二者拓一をせまられた Raimon VI が、やむなく戦いに踏み切ったというのが真相であった。しかし、Peire Cardinal の目には、そうはうつらなかつた。後に引用する Raimon VI への讃辞は、彼がどんなに候を信頼し、讃美しているかをよくかたっている。Peire Cardinal にとっては、Raymond VI は、絶対であり、その彼を窮地に追いつめた、Arnaut Amalric は、traître 以外の何物でもないわけである。

Tals a el cap la corona	Tel a au chef la couronne (mitre)
E porta blanc vestimen	et porte blanc vêtement dont la
Que -l voluntatz es fellona	volonté est félonne comme celle d'un
Com de lop o de serpen,	loup ou d'un serpent.
Car qui tol e trais e men	Car si quelqu'un vole, trahit et ment,
E aussi e empoizona,	tue et empoisonne, d'après cela apparaît
Ad aquo es aparven	bien quel vouloir en lui (bourgeoine) se
Cals volers i brotona.	développe

かくの如きが冠いただき<sup>註(7)</sup>  
 白い服きてござる  
 おおかみのごと、はた又へびのごと  
 よこしまな心もて  
 盗み、裏切り、うそつき、毒殺  
 人に先んじてやりたがる

《盗み》、《うそつき》は、聖職者の常として、世のそしりをのがれられぬところであろう。《裏切り》は、先に既に説明したが、ここにあらわれた《毒殺》も又、1つの allusion で、1209年、Bézier の vicomte であった Roger Trencavel を Carcassonne の城にとじこめ、毒殺した首謀者であったことをさしているようである。この Roger Trencavel は、Raymond VI の甥にあたり、完全に、cathare であった為に、Simon de Montfort<sup>註(8)</sup>によって、その最初の犠牲者として葬られてしまった。心情的に cathare の教義に同調するものを持っていた Cardinal は、この死が、とりわけ毒殺であっただけに深い憤りを持っていたのであろう。<sup>註(9)</sup>

さてこの期の聖職者への批難のほこ先は、たまたま、Estève de Beaumont 事件がおこったことにより、3編の詩の中に、Cleres 全体への批難という形をとってあらわされる。

“D’ Estève de Belmon”  
 “Un sirventès trametrai”  
 “Un sirventès ai en cor”

がそれである。この Estève de Beaumont は le Puy のカテドラルの cleric であり、多分、chamoine でもあったらしい。その Estève が、夕食に招いておいて両親と息子そして料理人、召使、

監督官を殺害した。この犯罪は、聖職者がおこしたものであったが為に、Estève は結局罰せられることなくすんだ。Peire Cardinal の Estève への憎しみが、想像を絶するものであることは、後に引用する詩句によくあらわれている。しかも、この Estève も十字軍兵士達をけしかけ、Tudèle や、le Puy, Montferrand 等へ掠奪にいかせた先の事件にも関係していた。

Esteves a la testa gròssa                      Estève a la tête grosse et la ventre  
E-l ventre redon coma bòssa;                      rond comme bosse; ses épaules semblent  
Sas espatlas semblan trasdòssa ,                      lent sac au dos, jamais je ne vis  
Anc no vic el mon lajor òssa ;                      au monde plus laide carcasse;

エステーヴ、大頭、  
こぶのようなでっばら  
まるで袋くっつけたよな肩  
がい骨よりなお醜悪なもの見たこともないわい

註(10)

と、その容貌から手はじめに、

Mays Esteves a trop mala ratela,  
Que a l'escarcela  
Ten apcha o astela .  
Malament capdela  
Sels qu'entorn lui estan;

Del bran  
Per la guarguamela  
Empenh si lo trenchan  
Guaban;

Tol bras o ayssela  
Tot rizen e perlan,  
Chuflan ;

Pueys, qui lo 'n apela ,  
No -s defen tan ni quan.

エステーヴ、あまりに悪いねずみ

註(11)

財布片手に斧と矛離さず  
まわりのもの、むごう扱う  
その槍のどをつらぬき  
楽しみつつきりきざみ  
笑みたたえ、語りつつ  
口笛吹いて  
腕を持ち、又肩を持つ  
おまえを誰かがののしったとて  
誰がかぼうてやるものか

と手きびしい。その後には掠奪をけしかけた Clercs への批難が続くのであった。

#### (IV) Français に対する sirventès

Français に対する反感も、又それに劣らずひどいものである。

“Lo jorn qu’eu fui natz”

中にその批難をみると、ざっと次のように続く。

Que -l mon fo semenatz

D’una laga seménsa

Que ten empachatz

Los regnes e -ls comtatz,

Don ieis desconoissénsa

E tortz e baratz

Que s’espan ves totz latz.

註(12)

この世は、悪の種子の

蔓延するがままに

王国を、伯爵領を占領され

無知、不正、欺瞞も

その種子に起因し

四方八方、拡散す

L’ uns tol e l’ autre pren

E l’ autre es coysseu ;

L’ autre es en consire

Car hom si defen ;

L’ autre embla e men,

E l’ autre va aussire

Homes per argen

E l’ autre per nien.

註(13)

ある者は、掠奪し

他の者は、かすめとる

ある者は、その共犯者

人は皆我が身かわいさゆえに、

ある者は、盗み、又嘘をつく

ある者は、金の為

ある者は、理由もなく

人を殺す

car le monde fut ensemencé d’une vilaine  
semence qui occupe et obstrue les  
royaumes et les comtés et d’où sortent  
l’ignorance, l’injustice et la fraude, qui  
se répand de tous les côtés.

L’ un pille, l’ autre prend  
et l’ autre est complice ;  
l’ autre est en souci  
parce qu’on se défend ;  
l’ autre vole et ment,  
et l’ autre va tuer les gens  
pour de l’ argent  
et l’ autre pour rien.

これが、Simon de Montfort のもたらした悪だと、彼は嘆く。あくまでも Toulouse 人であり、Toulouse への愛着は、いやが上にも、北方十字軍兵士達 Français への反感を、そそのものであったのであろうか。Peire Cardinal の satire は、その舞台を、南仏の事件だけでなく、Français への反感をあらわす事件を、国外にまでひろげている。1212年から1213年、Sicil 王Frédéric が、Innocent III とPhilippe Auguste に支持されて、イギリス王 Jean -Saint -Terre と、ドイツ皇帝、Othon IV に対して戦うことになった。Peire Cardinal は、この Frédéric に対して、

“Per Fols Tenc Polhems E Lombartz”

の中で、「魂の狂気と、破城の中で、無差別に殺戮する狂暴なこの Français に従わないように」<sup>註⑩</sup>  
忠告する。

1215年の公会議で、Raimon VII に約束されたのは、ローヌ川以東の領地と、十字軍のいまだ征服されざる土地は、その成年後に Raimon VII に委ねるというものであった。かくして、かつての大領主は、その本拠地 Toulouse をも、Simon de Montfort の手に渡すことになってしまったのであった。Raimon VI が、これを甘受できるわけもなく、1216年頃から、Midi の失地回復の為に蜂起の準備を始め、1217年 Toulouse の蜂起をあわせて、Simon 軍と対決することになった。この頃に書かれたとされる “Falsedatz e desmezura” の中では、更に言葉は辛辣になる。

Falsedatz e desmezura

An batailla empréza  
Ab vertat e ab drechura  
E vens la falséza.  
E deslialtatz si jura  
Contra lialéza,  
E avaretatz s'atura  
Encontra larguéza;  
Feunia vens amór  
E malvestatz valór,  
E peccatz cassa sanctór  
E baratz simpléza.

欺瞞と乱気が  
真理と正義に  
戦いをしかけ勝利した。  
不忠が忠義を  
おい払い  
貧欲は寛大さを  
押しつけ  
裏切りが愛にかち  
悪が尊とばれ、  
罪が聖らかさを追いたて  
無垢なものを騙す。

註⑩

Fausseté et démesure ont entrepris la  
bataille avec vérité et droiture et la  
fausseté est victorieuse. Et déloyauté  
se conjure contre loyauté, et avarice  
s'efforce contre largesse; traîtrise  
vainc amour et méchanceté valeur, et  
péché chasse sainteté et fourberie  
simplicité.

Français 達のもたらしたのは、かくの如き、悪徳の限りだと嘆くと同時に、仏軍との決定的な戦いを前にして、南仏各侯の士気を、ふるいたたせる為に歌われたものである。当然、Raimon VI の、徳を、ことさらにほめたたえる句が後に続く。

Coms Raimons, ducx de Narbóna,  
Marques de Proénsa,  
Vostra valors es tan bóna  
Que tot lo mon génsa,

Comte Raymon, duc de Narbonne, marquis  
de Provence, votre valeur est si bonne  
qu'elle orne le monde entier, car de la  
mer de Bayonne jusqu'à Valence il y a

Car de la mar de Baiona  
Entro a Valénsa  
A grans gens falsa e felóna,  
Laj'en viltenénsa ;  
Mas vos tenes vil lor ,  
Que Frances bevedor  
Plus que perditz al'austor  
No vos fan teménsa.

註(6)

レモン伯、ナルボンヌ公  
プロヴァンス男爵、  
御身の徳は、かくも偉大  
全世界を統治する  
バイヨンヌの海から  
ヴァランスにいたる迄  
誤ち多き、嘘つきの  
醜い人々がいるが故に  
御身が敵対するのは彼らのみ  
飲んべのフランス人など  
そこらのいわしやこほどにも  
御身を恐怖させるものか

この戦いは、幸いにして、一応 Raimon VI 側の勝利に終った。1218年6月 Simon de Montfort が戦死し、仏軍側の足並みが、乱れた為であった。しかし、Raimon VI, Philippe Auguste, Raimon-Roger 共に、相前後して、死の床につく。Cardinal の詩も、次第にものうさを増してくる。

“Mon chantar meil rotraire al cuminal”は、この頃につくられたものだといわれている。

Rei e comte, bailho e senescal  
Volo -ls castels e las terras sazir  
A lur acort e paubra gent delir,  
E li baro son, li plus, atretal  
Que cascuns ditz : ieu penrai d'aco mièu,  
E ab tot son plus paure que romièu,  
E non tenon vertat ni sagramen  
E nos autre em d'aquel mezeis sen.

註(7)

王も伯も大法官もセネシャルも  
われがちに城や領地をとりたがる  
貪しき者を踏みつけにして  
男爵だって大方は、いわれての通りさ  
私も、自分のものは守るさ  
しかし、彼らときたら巡礼者よりも哀れだ  
真もなく、約束も守らぬ

force gent fausse et félone, laide en  
son mépris (laidement méprisante) : mais  
c'est eux que vous tenez pour vils, car  
les Français buveurs, pas plus que les  
perdrix à l'autour, ne vous font point  
peur.

Rois et comtes, baillis et  
sénéchaux veulent saisir les châ-  
teaux et les terres à leur  
volonté et détruire les pauvres  
gens, et les barons sont, la  
plupart, tels que chacun dit : je  
prendrai sur mon bien, et pourtant  
ils sont plus pauvres que des  
pèlerins, et ils n'observent ni la  
vérité ni leur serment, et nous  
autres aussi sommes dans cette  
même manière de penser.



皆全て、かくの如き考えの中に入らされる

1226年、5月末には、Arles 王国にも Français 達は入ってくる。Cardinal の Raimon VII を支持するよにという呼びかけがその前になされる。かつて、Raimon VI に対してなしたと同様の讃辞をささげ昔日の勢力を望むべくもない諸侯への最後の努力を試みた。

A Toloza a tal Raymón	A Toulouse il y a un tel Raymon
— Lo comte que Dieus Guia !—	— le comte que Dieu veuille guider !—
Qu' aissi com nais aiga de fón	que tout comme l'eau sort de la fontaine,
Nais d'el cavalaria;	de lui naft chevalerie,
Car dels peiors homes que són	Car des pires hommes qui sont
Se defen e de tot lo món,	il se défend et du monde entier,
Que Frances ni clerguia	si bien que ni les Français ni le clergé
Ni las autras gens no -lh an frón,	ni les autres gens ne peuvent lui faire front,
Mas als bons s'umilio	mais il s'incline devant les bond
E -ls mals confón.	et il détruit les méchants.

トゥールーズにかの Raimon あり

— 神のお導きにふさわしい伯 —

水の泉から流れるがごと

生まれながらの真の騎士

この世の悪人しりぞけぬ

Français, 聖職者, 他の輩

彼の前に立ちもせず

しかし善には身を低う

悪は、これを打ちくたく

かくも、南仏をゆり動かし、Cardinal の身辺を危くした、この Croisade des Albigeois も、1229年、パリ条約で一応の終結をみる。

## 〔V〕結 び

以上みてきたように、第一期の彼の詩作の時期は、まさしく、十字軍と共になされたといっても、過言ではない。そして、この異端者追放の為の戦いは、その発端から、カトリック信者も、女も、子供までもむごたらしく殺す血なまぐさい戦いであった。法王は、法王で、王は、王で、又諸侯は、諸侯で、聖職者は、聖職者で、各々の利益の為に狂奔する。カタリ派の教理そのままに、この世は、地獄であった。弱い貪しいものだけを犠牲にして Cardinal は嘆く。そしてこの十字軍のもたらした深い傷みは、Cardinal の以後の詩に、ずっと影をおとし続ける。

この十字軍の間につくられた Français への憎しみと反感は、しかし、後の統治の公平さをみるにいたって、やがて消えていった。しかし、聖職者への批判は、彼に対し、異端への疑いをかけさせることになり、一時、Aragon 家へ身を寄せることにもなったのだった。Cardinal の聖職者への批判は、それによって、鈍ることなく、一生、手きびしい辛辣な Sirventès をつくり続ける。

彼のペシミストとして、モラリストとしての性格が、この期に形成されたといえるであろう。

【註】

- (1) René Lavaud : Poésies Complètes du Troubadour Peire Cardinal (Edouard Privat)  
1957 , p.615
- (2) Charles Camproux : Le Joy d'Amor des Troubadours (Causse & Castelnaud)  
1965 , p.p.69~92
- (3) Ibid p.79
- (4) Joséph Anglade : Les Troubadours (Armand Colin, Paris) 1928 , p.185
- (5) Karl Vossler : Peire Cardinal, ein Satiriker aus dem Zeitalter der Albigenserkreige  
von Karl Vossler 1916  
(Verlag der königlich Bayerischen Akademie des Wissenschaften)  
p.p.44~45
- (6) Pierre Belperron : La Croisade contre Les Albigeois et L'Union du Languedoc  
à la France (Librairie Plon) 1945 , p.216
- (7) René Lavaud : op.cit, p.98 v.v.35~38
- (8) Ibid, p.101
- (9) Karl Vossler ; op. cit. p.p.46~50
- (10) René Lavaud ; op. cit. p.72 , D'Estève de Belmon M'envèia, v.v.34~37
- (11) Ibid ; p.144 Un Sirventès trametrai per Messatge, v.v.19~32
- (12) Ibid ; p.370 , Lo Jorn qu'eu fui Natz, v.v.26~32
- (13) Ibid ; p.372 , v.v.39~48
- (14) Ibid ; p.104 , Per Fols Tenc Polhes E Lombartz
- (15) Ibid ; p.78 , Falsedatz e desmezura, v.v.1~12
- (16) Ibid ; p.80 , v.v.37~48
- (17) Ibid ; p.388 Mon Chantal Vueil Restraire al Cuminal, v.v.9~16
- (18) Ibid ; p.64 , Ben Volgra, si Dieus o vulgués, v.v.41~50

各詩につけた仏訳は、René Lavaud のものを引用した。

又十字軍の各事件については、その大部分を Pierre Belperron の著によったが、Charles Camproux 氏のご教授におうものもある。なおこの小論は、1974年10月、日本仏文学会で口答発表したものに加筆したものである。